

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023 年

No. 146

2023年5月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2022 in 京都 報告① … 1
SEE性教育アカデミー 2022 in 京都 報告② … 4
北東北性教育研修セミナー2022春 報告 … 7
新連載 わたしたちの性教育アクション② … 11

多様な性のゆくえ③ … 12
新連載 出会いは世界を広げていく② … 13
今月のブックガイド … 14
JASEインフォメーション … 15

● SEE 性教育アカデミー 2022 in 京都 報告①

性と対人関係に課題をもつ当事者の 回復を支援する SST

～生きる力をつける SST ワークショップ～

はじめに

今回のSEE性教育アカデミーは、鴨川沿いの桜が満開の3月25日(土曜日)、京都市の同志社大学今出川キャンパスで行われた。2022年度第2回目の開催になる。第1回目は、11月5日(土曜日)大阪公立大学 I-Site なんばで「性と対人関係について語る安全な場づくり～SARにつなげるネットワーキングスキル～」のテーマで行われた。それに続くものである。

SEE (Sexuality Education & Empowerment) は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた10年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として2018年に開講したもので、これまで概ね年2回のペースでセミナーを開催してきた。

「SEE性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn (何を学ぶかから、どう学ぶかへ)をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だ



けでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

今回のテーマは、「性と対人関係に課題をもつ当事者の回復を支援するSST～生きる力をつけるSSTワークショップ～」。SSTとは英語のSocial Skills Training (ソーシャル・スキル・トレーニング)のことである。SSTの具体的な内容については、SEEの共同代表である野坂祐子大阪大学大学院教授が、後半(4ページ以降)で詳しくレポートしているのでそ

ちらに譲り、まず、メイン講師である前田ケイ氏についてそのご経歴を簡単に紹介する。

現在、SST 普及協会の認定講師および顧問、ルーテル学院大学名誉教授。ハワイ大学を経て、コロンビア大学大学院ソーシャルワーク修士課程を卒業後、1988 年から東京大学附属病院精神神経科デイホスピタルにおいて SST の日本への導入に尽力。その後、日本各地での精神科患者のリハビリのために SST の普及にかかわり、更生保護や矯正教育分野での SST の実践および支援者の養成に当たっている。

今回は、ご高齢にもかかわらず仙台から、SEE 性教育アカデミーのセミナーのために京都まで出張してくださった。



前田ケイ氏を講師に行われたワークショップ

SST ワークショップ体験者の声

主催者の挨拶後、心理相談やケースワーカーなどに関係する職種中心の受講生 18 名、スタッフ 4 名、そして講師 2 名の全員が、円座になって 13 時より「SST 体験ワークショップ」が始まった。ワークショップの具体的な内容は、野坂祐子氏のレポートに譲って、ここでは、受講後の参加者の感想の一部を紹介する。

- グループワークの力、可能性を感じました。円座の中の小さいサークルに入って最初は見られている感があるのかなあと思いましたが、実際には「見守られている」感じを持ちました。
- 参加しないで見学だけがよくても OK 等、絶対、必ずというのがなくて自由度が高いと思いました。SST の本質が初めて見れて感謝しています。
- SST について職場で直接実施することはないのです



が、知りたくて参加しました。実際の当事者を主役と考えニーズを十分に把握して、具体的な行動リハーサルを同意と相談しながら行う点は、日々の仕事で正しい行動を押し付ける型で教えたつもりになっているのではとハッと気がつきました。

- 当事者の世界を理解することから SST が始まることを知った。貴重な体験でした。
 - 実際に見たり体験しながら SST について学べたため、大変勉強になりました。貴重な機会をいただきました。
 - 小さな子どもたちにもわかりやすい SST の取り組み方が学べるチャンスが欲しいです。小さな子どもたちからの性教育についても学んでいきたいです。楽しく学んだ一日でした。
 - とても貴重な体験をありがとうございました。SST とは……と疑問に思う部分が多かったので、得るものは本当に今回多く、また現場で生かしたいと思います。
 - 半日の開催はもったいないです。もっと時間が欲しいと思いました。新たな気づきを得てそれを現場でいかしていくつもりです。
- 体験型ワークショップは、途中 10 分ほどの休憩を挟んで、16 時近くまで約 3 時間であった。その後、2022 年 11 月 5 日に開催されたセミナーの講師であった藤岡淳子氏（大阪大学大学院名誉教授・臨床心理士・公認心理師・一般社団法人もふもふネット代表理事）との対談が約 40 分ほど行われた。

対談「STT との出会い」

テーマは、「性に係わる支援に活かす SST について」。対談は、藤岡淳子氏が前田ケイ氏に出会った場面の話



から。

その場面は、藤岡氏が少年刑務所に勤務していたときであるという。教育部門の責任者であったが、部下が全員年上の男性で、なかなか思うように進められなかった時に、その打開策として前田氏を講師としてお願いし、アグレッシブなワークショップに、そしてそこで教えられた SST に助けられたという話から始まった。

その後、話は前田ケイ氏のアメリカ留学でのソーシャルワークとの出会いに進んだ。

戦後間もなく、大学4年のときフィリピン大学に留学する機会に恵まれた。しかし、大学の許可は承認されたが、ビザが発行されなかった。理由は、女子学生がまだまだ反日感情の強い国に来るのは、生命の保障ができないということだったという。この留学のプロジェクトがアメリカの財団の主催だったこともあり、ではアメリカの大学で1年間学ばないかという提案があり、結果的にハワイ大学へ留学することになった。

日本では英文学部だったのだが、思いもしなかったハワイ大学で、英文学でなく社会学を学ぶことにし、ここでソーシャルワークに出会ったのだという。

ハワイ大学の留学ののち、奨学金を受けられることになって、アメリカ本土ニューヨークのコロンビア大学の大学院に留学できたのだという。この移動は、バスによる大陸横断だったとか、奨学金受給の幸運な出来事などエピソードを交えて語られた。大学院の2年間で、1200時間の実習などで、SSTを学んだという。当時の女性としては、たいへん希有な経験を語られた。

対談は、後半に入り、藤岡氏から「現在の日本におけるソーシャルワーク、グループワークについてご経験からアドバイスが欲しい」という要望が前田ケイ氏

にあった。

前田氏は、アメリカなどと比較して、まず「日本は遅れている」ということを自覚して、「いまできること、いまやっていること」をほかの専門職と連携して仕事を進めていくことが、実際に現場の役に立つことになるとのアドバイスがあった。ご自分の経験では、医師や看護師、作業療法士などの他の職種の人たちとの連携が欠かせないという。そして、変化する社会に対応できる学びを心掛けることを怠ってはいけないと強調された。最後に、昭和6年生まれであるという前田氏は、当時のステレオタイプの女性の生き方に対する社会情勢の中で、両親を含め、多くの理解者に出会って、今日があると締めくくられた。

対談終了後、藤岡氏の進行で、「わかちあい」が行われ全参加者の感想が述べられて、若々しい前田ケイ氏をメイン講師にむかえた研修セミナーは終了した。

最後に、対談にたいする参加者の声を紹介する。

- 実践的な知識、技術を学べるとともに勇気づけもいただきました。ありがとうございました。前田先生のご健康のヒケツを伺いたかったです。ジムに行かれているのか……。藤岡先生とのコラボ最高でした。
- 前田ケイ先生の学生時代のお話やアメリカとの違いを聴くことができ大変興味深かったです。相手のオーダーメイド……相手のニーズにあった SST 本当に参考になりました。『保護司面接のための SST』の著書を参考にし学び続けます。
- 前田先生ワールドに引き込まれました。

(文責・編集部)

※次回の SEE 性教育アカデミーセミナーは、2023 年 9 月 3 日（日曜日）仙台市で開催の予定。

◎ SEE 性教育アカデミー 2022 in 京都 報告②

支援者のスキルアップとネットワーキング を目指した SST ワークショップ

SEE 共同代表、大阪大学大学院教授 野坂 祐子

ソーシャルスキルトレーニングとは

講師を含む全員が円座になって、ワークショップがスタートした。最初に、SST について次のように説明された。「SST とは、当事者が支援者と一緒に考えながら、特定の対人状況の中で自分が取りたい行動の具体的な目標を決め、練習をして、必要な認知（考え方）と行動の能力を身に付けていく方法のこと」（前田ケイ著『保護司面接のための SST』p.2、日本更生保護協会）。主語は、「当事者」であり、支援者が〈やらなければ〉と気負うのではなく、当事者と〈一緒にやっていく〉ものである。支援が終結したあとも、当事者が自分の行動を考え、意思決定できるようになることが目指される。話し合うだけでなく、実際に練習をしてみるところが SST の核心である。

演習に先立ち、2つのルールが提示された。1つは「嫌なことはやらなくてもよい」、2つ目は「いつ質問をしてもよい」である。これは演習時だけでなく、SST の実践においても同様である。本人が「嫌なこと」に気づき、それを意思表示して行動選択するという一連の行動そのものがソーシャルスキルにつながるのだろう。いつでも「わからない」という率直な意見を歓迎し、相互的な対話を通して練習を重ねていく点も同様である。実際、ワークショップでは、受講者からの質問や意見に沿って、即興で SST 演習の課題が提示されたのだが、つねに講師は受講者の意思を確認し、どんな発言にも丁寧に返答されていた。ルールが体現され、ポジティブなロールモデル（見本）となっていた。



ここで、SST を実践しているそれぞれの受講者が取り組みの内容や疑問を発表した。支援の対象者は、子どもから成人までさまざまであり、発達障害のある子どもや家庭への支援に携わっている人も複数名おられた。講師は、発達障害のある子どもに関わるすべての職員に SST のスキルが求められるとコメントされた。日々の生活で実際に起きていることを取り上げて練習するのが肝要である。

演習に入る前に、今回の研修で「ロールプレイ（役割演技による演習）をやってみたい人」「見ていだけがいい人」など、講師から受講者の意向が確認された。席を立ったり、着席したりして、意思表示をするというだけの指示だが、少し体を動かすだけでも場が活気づき、なごやかな雰囲気になったのが印象的であった。

行動リハーサル「セックスの誘いを断る」

SST の進め方にはさまざまなものがあるが、代表的なものが「行動練習」を取り入れた方法である。近い将来、実際に起きる対人場面に備えて、本人が支援



者と相談して、その場にふさわしい行動をあらかじめ練習しておくのが「行動リハーサル」である。

今回は、若者の性の安全や健康に関わる人が多かったため、講師から「交際相手からセックスを求められたが、今は断りたい」という場面が課題として挙げられた。アメリカでは『セックスを断る 101 の方法 (101 ways to say NO to sex)』というパンフレットがあり、実際の高校生のアイデアが紹介されている。これを用いながら、男女の高校生のロールプレイを行った。

練習をする当事者がその場面を具体的にイメージできるように、支援者が〈ロールインタビュー〉をしてから始める。講師が「恋人から迫られて、困ってしまったのね」など、練習する場面を特定し、上記のパンフレットを示す形で「いろいろな言い方があるけれど、どの言い方でやってみる？」と〈練習課題〉を具体化する。これを〈ターゲット（標的）行動〉といい、必要に応じて支援者が見本を見せる（モデリング）。ロールプレイが単なる〈お芝居〉にならないように、「相手はどんなふうに言ってくるの？ いつものようにやってみてくれない？」と対象者に役割交代を求め、よりリアルな状況を設定する。

ロールプレイが終わったら、すぐに支援者が〈よかったところ〉をフィードバックする。声の大きさや言い方、内容や姿勢などを伝え、うえて、「さらによくするには…」と提案し、もう一度練習をする。演技とフィードバックを切り替えるために、支援者が〈手を叩く〉といった合図をすると、何をしているか混乱しなくて済む。「次に、そういう場面になったらやってみて。また報告してね」と伝えて終える。これを〈チャレンジ課題〉と言い、日常場面で練習していく。グループのなかで〈チャレンジ課題〉を実践する機会を設けてもよい。

行動リハーサルのポイントは、ただ練習するのではなく、〈練習課題〉を明確にすること。一般論ではなく、〈テーラーメイド〉であることが強調された。

認知再構成法「考えを変える」

感情的に反応してしまい、対人関係がうまくいかない場合、考えを変える練習をするのも有効である。研修では、相手の態度を見て「バカにしがって！」と怒りを爆発させてしまう事例が紹介された。「相手は自分をバカにしている」という認知（思考）が感情を生むという認知行動療法の考えを前提とし、とっさに頭に浮かんだ自動思考を別の考えに変えていく方法である。この例では、「これは修行だ」と考えることで、自分を落ち着かせたという実践が挙げられた。

グループでの SST 「気持ちを伝える」

次に、グループで「セックスを断る」場面の SST を行った。性行為を断ると同時に、パートナーを大切に思う気持ちを伝えるにはどうしたらよいか。講師がいくつかの例を示しながら、グループで意見を出し合う。ロールプレイの参加者からいろいろアイデアが出されると、講師は「一般論ではなく、この人（当事者）にとって役立つ意見を出すように」と介入し、話し合いの方向性を修正された。

グループの場合も、個人 SST と同様に、テーラーメイドの練習課題と行動リハーサルを行うことが重要である。グループの話し合いでは、参加者の体験談の〈持ちより〉になりがちだが、ターゲット行動を明確にするためには「その人の状況」を明確にする必要がある。

ここで取り上げた練習場面のよう、パートナーと



のコミュニケーションは相手のあることゆえに、〈100%うまくいく方法〉があるわけではない。「やってみよう」と本人（当事者）が思えるかが重要であり、必ずしも1回のグループでよい方法が見つけられなくてもよい。

別の視点について理解する「金魚鉢テクニック」

女性が男性パートナーにセックスを断るという課題からの流れで、受講者のうち男性だけで話し合うというグループも体験した。異なる視点について知るための技法であり、ここでは男性メンバーが「金魚鉢の中を自由に泳いでもらう」、つまり、外円のメンバーを気にせず、内円のグループだけで話し合った。

この技法は、カップルセラピーでも用いられており、自分とは異なる属性や立場の人の考えについて知る機会になる。

問題解決法のための「ブレインストーミング」

さらに、問題解決法の一例として、研修のなかで出された質問（「電気の消し忘れによる夫婦間トラブル」）を題材にして、意見を出し合うブレインストーミングを行った。問題解決法を挙げたあと、それぞれの方法の「長所（プラス面）」と「短所（マイナス面）」を書き出し、一覧表にする。実行できる解決策を本人が選び、必要があれば行動リハーサルを行う。

悩んでいる状況をひとりで考えていると、問題解決法が浮かばないものである。こうしたブレインストー

ミングは、当事者の認知レパトリーを広げることにもつながる。

自分の行動パターンをふりかえる「自己研究」

別のグループでは、「子育てに悩む母親」が例に挙げられた。講師から「浦河べてるの家」で始まった当事者研究について紹介され、子どもが自分のことを理解していく「自己研究」の実践例が示された。例えば、タブレットがやめられない子どもが「自分の心の中の状態」をキャラクターで表すなど、さまざまなやり方がある。母親役は、「親子で自己研究をやってみる」という計画を立てた。

ワークショップをふりかえって

ワークショップでは、ほかにも「思春期の子どもと親が性について話す」「タクシーの運転手と世間話をする」など、性に関する親子の会話から見知らぬ人との社交まで、流れのなかで出てきたさまざまなトピックスが扱われた。いずれのケースも、講師が何度も「本人は何に困っているの？」「それはどんな状況なの？」と、当事者の視点や課題状況を明確にしておられたのが印象に残った。

また、SSTの演習中に、支援者の見本を示す講師が「私の意見を言ってもいいですか？」「どちらがいいでしょうね」と、つねに相手の意思を確認していたことも、当事者主体の取り組みにおいて重要と感じた。練習の主体は当事者にあるが、それをマネジメントするのは支援者の役割である。そこには支援者の援助スキルと相手への関心が不可欠であり、そうした専門的でサポート的な関わりがSST、ひいては支援や教育の基本であると再認識した。

グループでのSSTが多く取り上げられ、多様な考えや感じ方を共有する〈場づくり〉について学ぶこともできた。SEEでは、SAR（Sexual Attitude Re-assessment：性に関する自己の価値・態度の見直し）」の前提となる安全な場づくりと語り合いを体験する研修を継続している。今回のグループでのSSTは、それと方向性を一にするものであり、SARに向けた取り組みの一つの柱としても位置づけらる。引き続き、支援者のスキルアップとネットワーキングを目指した研修を企画・実施していきたい。

●北東北性教育研修セミナー 2022 春 報告

東北、PRIDE の歩む先

2023年3月18日（土）、東北6県（青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島）の多様な性の尊重を訴えるパレードやマーチの主催者団体が登壇するオンラインセミナーが開催された。これまでの歩みを振り返り、今後の展開を話し合った。（参加者40名）

北東北性教育研修セミナー実行委員会 共同代表 岡田実穂
青森レインボーパレード実行委員会

青森からの視点 歩みを始めた時から

2014年4月27日、青森において Community café & bar Osora ni Niji wo Kake Mashita というコミュニティスペースをオープンさせた翌日、東京でのプライドイベントが開催されている様子を見ながら、青森でのパレード第1回の準備を私たちはしていた。

パレードをやりたいと思っているということを表明したら、「なんでわざわざそんな田舎でやるのか」「当事者たちにとっては迷惑でしかない」「目立ちたいなら東京に行けばいい」などという声も届いた。とても強い風が吹いている日で、プラカードを持つのも大変だった。記録用に撮った動画は、私たちの声よりも、風の音ばかりを記録していた。

青森で活動を始めてから、東京など首都圏で活動してきた事柄について「それは東京でのことだから」と多くの人に言われた。それは一種の諦めと同時に発せられる言葉のように思えた。東京では大丈夫でも、青森では違う。相談を受け付けていても、「青森ではこれ以上生きていくことが難しい」ということを言う当事者たちがとても多かった。東京のパレードで発せられる「ハッピープライド」の声が、ここまで届いていない。暮らす場所によって私たちの「生きやすさ」は変化する。それでいいのだろうか？ 私たちは、いつだって同じ空の下に生きているのになあ、そんな思いが、パレードを始める一つの思いであったと思う。

青森での1回目のパレードがたった3人で始まったことについて、それは単純に言えば広報などもろく



各団体が活動紹介、今後について語った

にせずに、勢いでスタートしたものであるからである。逆に言えば、勢いでなければ始めることができなかった、とも言える。何故地方でそんなことをやるのか？ その答えはたった一つであった。「私たちがここに生きているから」それ以上のことはない。東京だけじゃない、どこにだって性的マイノリティは存在しており、尚且つ、こうしてその存在の可視化を閉ざそうとするような言説がまかり通る中で、改めて言わなければならないのだ。「私たちはここに生きている」と言うことを。

青森でのパレードが回を重ねる中で、首都圏型ではない地方でのパレードというのも少しずつ開催されるようになってきた。しかし、東北の他の地域でもやらないの？ という話をしていると、「いやいや、青森は特別だから」と言うような声も聞くことがあった。そう聞く度に思ったのは、「青森のパレード…たった3人ではじめて、回を重ねても100人にも行かないパレードになんの特別さがあるのだろう…」(青森のパレードが100名を超えたのは、4回目以降である)ということだった。基本的に、パレードは歩き出せば始まる。歩くのか、歩かないのか、それだけのことであ



2022年の青森レインボーパレード

る。そして、その「歩く」という可視化の営みに、私たちはどのような思いを持っているのだろうか。

青森のパレードが一貫して伝えてきたことは何点かある。まず第一に「故郷を帰ってこられる街にしたい」ということ。青森ではもう生きることができない、と言って出ていった人たちに、帰ってこられる街を作りたいということ。そして「一緒に歩くことが出来ない人の思いも一緒に」ということ。差別や偏見のある地域の中で、共に歩くことが叶わない人の思いや、青森の端のほうにいて、自分は一人だって思ってる人にも届くように声を届けようということ。この二つは、今も大事な思いとして持っている。そうして、今年で10年目となるこの歩みは、やっと200人程の参加をいただくパレードになった。10年が経とうとする今も、小さな歩みであることには変わりがない。「テクテク生きてく歩いてく」なパレードである。

そんな中、昨年、2022年はとても嬉しい一年になった。東北の全県でパレード／マーチが開催されたのだ。東北では出来ない、そんなことがまことしやかに言われ続ける日々を見ていたからこそ、とても感慨深いものがあつた。そっか、みんな歩いたんだ。きっと、そこに何か意味があるから歩いたんだよね。どんな思いだっただろう。楽しかったかな？ 嫌な思いとかしなかったかな？ どんな風に、これからのパレードをやっていくんだろう？ いろいろ、話を聞いてみたいと思った。そうして、今回、北東北性教育研修セミナーでは「東北、PRIDEの歩む先」というテーマでのセミナーを開催することとなった。

東北、PRIDEの歩む先 各団体の歩み

セミナーでは、青森レインボーパレード、Akita Pride March、いわてレインボーマーチ、ふくしまレインボーマーチ、みやぎにじいろパレード、やまがたカラフルパレード6団体が集まり、それぞれの活動紹介を行い、トークセッション、質疑応答という形で3時間の長丁場なセミナーとなった。

青森はこれまでの9回のパレードを振り返り、当事者たちの可視化の中で差別的反応の可視化もされるということについて話されたことが特徴的であったと思う。だからこそ、声を上げること、人権の尊重に基づいた取り組みを止めることをしてはいけないということを強調した。

秋田での取り組みについては、We Are Hereというテーマにも見えるように、差別や偏見、生きづらさがある秋田を出ていく当事者が多いという。その中で、その人たちにメッセージが届いてほしいということや、恐怖を抱えている人、カミングアウト出来ずにいる人に「あなたは一人じゃない」というメッセージを伝えていくことの大切さが語られた。秋田で開催する意味を改めて考え、身近な場所からメッセージを伝えていくということについては、まさに地域単位での活動だからこそ出来ることとしてパレードというものを位置付けている様子が見えた。

岩手の取り組みについては、スケジュールの都合で動画を配信するという形で紹介された。「多様な生き

方を選択・実現可能にして自分らしく生きる人を増やす」という目標のもと、ひとり親、ひきこもり、DV被害者など社会的マイノリティのエンパワメントを推進することという、交差性を重視した思いというものが共有された。居場所づくり（レインボーベグル作り等）や、国会議員の差別発言への抗議活動などのマーチ以外の取り組みというものも紹介されていた。マーチの参加に関しては、沿道からの応援の温かさや、当事者からの「生きててよかった」という言葉も紹介され、マーチ自体が地域の中で当事者たちの居場所になっている様子が見てとれた。本年の開催に向けてというところで、差別への怒りを示すということも語られたが、当事者たちの可視化の営みということから、政策等に向けた思いというところも重視されているのだなということが分かった。

福島では、他県からの「いつ福島でやるの？」という声がかきかけになって、県内の団体で相談しあって始まったという。話し合いを重ね、みんなが目指したい福島の形が見えてきた、ということが冒頭に語られた。COVID-19の影響下においてオンライン開催が続いたが、オンラインだからこそ言葉を発することができるという声や、オンラインであっても、「福島で開催されたことが嬉しい」という声があったことが紹介された。自分たちが先導するのではなくみんなで作るマーチであるという思いがあるという。マーチを開催して、福島を変えられる、居場所にできるのではないかと、という思いを持っていたという。実際に歩いてみて、沿道が温かさを感じ、これからも温かさを感じられるようにしていきたいという思いを新たにしたいということだった。そして、開催に際しては、開催そのものもそうだが、実際、福島県内と言っても遠距離で来ることが叶わない人も多くいて、その中でニュースで取り上げられたり、行けなくても感じるができる、そして地域の中で顔が見えることの重要性を感じたという。「この街を歩いている仲間」という顔の見える方が、首都圏型の取り組みではないからこそなされるのであろうということを感じる話であった。

宮城では「多様な性のこと、人権のこと、差別のことを個人的なことにしない」ということを目標として、すべての人が暮らしやすい宮城、性的マイノリティだけではなく、障害、外国にルーツを持つ人などについても含めた交差性のある「暮らしやすさ」ということ

を念頭においた活動をしているという。これまで宮城で活動してきた団体との協働でパレードを開催したり、地元根ざした企業からの協賛を募ることなどからも、街の中の暮らしやすさということに重点をおいた活動がされていることが伺える。

山形での取り組みは、山形大学のカラフルカフェでの取り組みというところから始まったそうだ。そこで話されていた、パレードをやりたいという思いと、パートナーシップ制度が欲しいという思いがあった。尚且つ、一緒に活動をしてきたレズビアン当事者のヒロさんが昨年亡くなったということを受け、彼女の「パレードをやりたい」という想いを引き継ぐ形で、パレード開催に漕ぎ着けたという思いが語られた。パレード開催まで準備期間が少ない中、学習会の開催などを通してなぜパレードが必要なのかということについて伝える時間も持った。また、北山形駅前にあるしょんべん小僧の衣替えに合わせて、レインボーの衣装をしょんべん小僧に着せるという取り組みも紹介された。各地に象徴的なモニュメントなどはみられるが、そうしたものがPRIDE仕様になるというのは、当事者にとって嬉しい取り組みだと感じる。「山形をパレードのある街にしようと思った」という言葉、とても印象深く残っている。

トークセッションにおいては、それぞれの発表を聞いての感想を含め、みんなで話してみたいことなどを自由に話すという形式で行われた。宮城から「地方ならではのところ、お祭りというより"歩く"ことから始めてきた」という発言があったが、実際に、規模としては全体として首都圏型のものからしたらとても小さいパレード／マーチであって、まさに"歩く"という行為そのものの重要性が強調されるものとなっている。その中に、それぞれの思いがあり、課題がある。

例えば、参加者の安全対策、ヘイトへの対策として、撮影禁止ゾーンの設置や、仮装グッズの用意などを行っているところも多くある。地域密着性があるからこそ、クローゼットの参加者に関する取り組みはどの団体も比較的重視しているというところが見られた。

また、情報保障、手話通訳、多言語対応など、各地予算規模として難しいところはあるながらもかなり考えられている様子も発表された。障害者の参加に関する合理的配慮をどう実践していくかなど、それぞれに悩みながら、考えられている様子に、地域単位のパレ

ードの予算規模も踏まえ、今後クラウドファンディングや企業協賛等含め、より多くの支援というものもパレード／マーチに対して行われていくことの重要性を考えることにもなった。

また、東北という形での連携が出来ることの大切さも語られた。東北というフレームを我々は有しているからこそ、今回のセミナーもそうだが、それぞれの課題を含め、意見交換の場を持ちやすいということはあるかもしれない。それぞれに少しずつ違うアイデンティティを持ちながらも、一つのフレームとして東北の声というものを全国に伝えていくということも今後、またしていければいいと感じる。

そして、国政のみならず、基礎自治体レベルでの働きかけの重要性についても語られた。議員たちがどれだけ理解するかということ、制度設計に関わる人たちに参加してほしい、両輪で動いていくことで当事者の声を伝えていきたいということは山形から話された。青森においても、基礎自治体への要望や、青森県における当事者アンケートの実施などを行っている。当事者たちの可視化の営みというものが、まさに今暮らすその場において、具体の施策に反映されていくということは、とても重要な「歩み」の先にあるもののひとつかもしれない。

福島の主催者からは「生まれ育って、自分を出せないで歩いてきた場所を、自分を出して歩いたという実

感は全然違うもの。私自身福島県嫌いがすごかった。体調を崩して帰ってきたけど、安心してられない。そこから活動を作ってみようかと思ったのがきっかけ。好きになりたい。嫌いだけど好きになりたいという気持ちが原動力になっていた。福島でもこんなに人とつながって、生きづらいと思ってた場所なのに、温かい声援に包まれて。スピーチの時に涙が出てきて。福島は変えられると感じた。」という発言があった。まさに、「好きだけど嫌い。嫌いだけど好き」という感情は、パレードをやってきて、多くの場で多くの当事者から感じることもある。「歩く」ということが、地域を変えるということに反映されていく。そこには、まさに歩いているその人たちがそのものがエンパワーされていくという過程の重要性というものがあるのではないかなと思う。

一步を踏み出す。歩くことを始めれば、パレードは始まる。その一步は、この街を少しでも生きやすい街にしていくための本当に大切な一步なのだ。今後も、その歩みの中で感じていくのだろう様々な事柄に耳を傾け、PRIDEの歩む先をしっかりと見ていきたいと思っている。皆さんぜひ、各地で実施されるパレード／マーチ、一緒に歩きましょう。そして、一緒に歩けないよという人たちの分も含めて、またこれから、ゆっくりと各地で、みんなで歩みを進めていけるのだと思う。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 しばらくの間、月～金曜日 11:30～16:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg



わたしたちの 性教育 アクション

前号では、カワセク立ち上げの経緯や活動理念、2022年度に取り組んだ性教育絵本制作事業についてご紹介しました。今回は、絵本完成後の出張読み聞かせ活動、市内施設への寄贈、これからの活動についてご紹介します。

市内外へのデリバリーも積極的に実施

性教育絵本『ゆめのかなうまち』は女性アイドルグループのメンバーになることを夢見る男の子を主人公に、権利として大事にされるべき個性や性にまつわる個性、ひとりひとりの個性について描いた作品です。

日本性教育協会の資料室にも1冊寄贈しています。

市内の児童館や小学校の朝の読書タイムなど様々なところに絵本の読み聞かせをデリバリーしました。作品内には、ご当地アイドル「川崎純情小町☆」、川崎市民の歌『好きです かわさき 愛の街』など、川崎市民ならみんな知っているローカルネタがちりばめられており、読み聞かせを聞いた子どもたちも大興奮でした。

また、市立図書館をはじめ、市内の主要な公共施設や、サッカーJリーグの「川崎フロンターレ」、プロバスケットボールBリーグの「川崎ブレイブサンダース」の施設などにも寄贈し、広く市民の方に手に取ってもらえることになりました。

2023年はワークショップやイベント出展に注力

2022年度は絵本事業に尽力しました。2023年度は絵本を活用したワークショップや市内のイベントへの出展などに力を入れようと考えています。また、メンバーから「SNSを絡めた新企画をやりたい」、「教職員と外部講師がつながる場を作りたい」、「インスタライブで発信を強化したい」など様々なアイデアが出ています。

カワセクの強みは、様々なバックグラウンドや職業のメンバーが集まって、肩肘張らずに性教育を語り合

新連載 #2

川崎市を舞台に地域密着型の 包括的セクシュアリティ教育を推進

かわさき包括的セクシュアリティ教育ネットワーク Csexologue



作成した性教育絵本の読み聞かせの様子

っていることです。多様性について語るカワセク自身が多様性を武器に活動しています。それぞれのメンバーの視点から毛色の違う意見が様々に出ることで「包括的セクシュアリティ教育のユニバーサルアクセス」の実現に一步步近づいていくと信じています。

地域密着型で個別性の高い活動の必要性

包括的セクシュアリティ教育は日々の暮らしと密接に結びついています。だからこそ、日々地域で起こる出来事や課題を自分事として捉えられる人々で構成される市民団体が包括的セクシュアリティ教育に取り組む意義があると思います。地域の特色・実情・人間関係などを考慮した、地域密着型で個別性の高い包括的セクシュアリティ教育活動が全国に広まってほしいと思いますし、カワセクがその先駆事例になれば嬉しく思うのです。

(文責・柳田正芳)

かわさき包括的セクシュアリティ教育ネットワーク Csexologue
(略称「カワセク」)

Csexologueは「セクソログ」と読み、包括的セクシュアリティ教育の頭文字である「CSE」、性科学を意味する「sexology」、対話(dialogue)や独白(monologue)の接尾辞「-logue」を合体させた造語です。

川崎市在住・在勤・在学の方なら正会員として参加可能です。市外の方も賛同会員として参加していただけます。ぜひ一度ホームページをご覧ください。

代表／柳田正芳 事務局／助産師のん

<https://kawasekucse.com/>

多様な性 のゆくえ

One side/No side [73]

論点化しなかったオフレコ破り

人のうわさも75日と言われるように、世の中の関心は移ろいやすい。最近では1カ月もつかどうか。

複数の記者とのオフレコ懇談の場で、首相秘書官が性的少数者や同性婚について質問され、「隣に住んでいたら嫌だ。見るのも嫌だ」と語ったのは、前回取り上げた岸田首相の国会答弁から2日後の2月3日夜だった。75日どころか、もう100日も過ぎている。秘書官は更迭されたので、実名でなく「元秘書官」としておこう。（まだ現職だった）元秘書官はオフレコ取材で岸田首相の国会答弁について尋ねられ「社会の在り方が変わる。でも反対している人は結構いる」「同性婚導入となると、いろいろ社会のありようが変わってしまう。国を捨てる人、この国にはいたくないと言って反対する人は結構いる」などと答えている。

さらに記者団から「悪影響は思いつかないが」と念押しされると、「隣に住んでいたら嫌だ。見るのも嫌だ」と述べた。首相をかばおうとしているうちに、かえって感情的な物言いになり、火に油を注ぐ結果になってしまった印象を受ける。

この発言について毎日新聞は3日午後11時前、発言の内容と元秘書官の実名を明記した記事をニュースサイトに掲載している。また、「オフレコ取材報道の経緯」という記事によると、懇談に出ていた記者から連絡を受け、東京本社編集編成局で協議した結果、オフレコを前提とした発言とはいえ「性的少数者を傷つける差別的な内容であり、岸田政権の中枢で政策立案に関わる首相秘書官がこうした人権意識を持っていることは重大な問題」と判断し、本人にも実名で報道することを伝えたという。

一方、元秘書官は同日深夜、改めて記者団とオンレコの取材に応じ、「やや誤解を与えるような表現をし、大変申し訳ない」と性的少数者や同性婚に関する個人の意見に言及した発言を撤回している。

今回の報道の論点の一つには、オフレコ破りの是非もあるのだが、毎日新聞の「政権の中枢で政策立案に関わる首相秘書官がこうした人権意識を持っているこ

とは重大な問題」という説明に異を唱える記事は、皆無とは言えないが、少なかった。私も実は、一連の発言をオフレコにしたまま、「政権の中枢」と報道に馴れ合い関係が残るようではかえって困ると感じた。

争点化は避けたいという事情もあったのか、岸田首相による秘書官更迭の判断も早かった……ということ、私の予想は見事に外れ、論点化はしなかったのだが、もう少しだけ考えてみたい。

オフレコ取材というのは、取材する側、される側がともに「記事にしない」という了解のもとに成り立つ取材手法である。ただし、聞いた話がまったく記事にならないのかというと、そうでもなく、誰が話したかを明確にしなければ、内容自体は報じられるケースもある。

私には政治記者としての取材経験がないので、また聞きなのだが、「政府首脳によると」とか「政権幹部は」などと書かれている場合、匿名でも情報の出どころが誰なのかはおおよそ察しはつくという。

ニューヨークで国連を中心に取材をしていた頃には公開の記者会見の他に、米国政府などの高官が外国人記者向けに会見スタイルの「Back Ground Briefing（背景説明）」を開くこともあった。背景となる知識の提供を目的にした勉強会的な感じで、私のような初心者の記者がうっかり発言者名を書いてしまうことがないよう、わざわざ「誰が説明したかは分からないようにする」といった趣旨の注意書きも配られていた。

今回のオフレコも正確には「Back Ground Briefing」として半ば慣行化しているものだろう。

取材する記者にすれば、解説的な記事を書く際の材料が得られる。政権側には守秘義務にしばられることなく、政策的な背景も含めた政権としての意図を伝える機会が確保できる。互いにメリットはある。ただし、便利さにかまけていると言論誘導の道具として使われるリスクもある。政権と報道の緊張関係を保つという観点から、今回は手順も含め、許容範囲のオフレコ破りだったと考えるべきだろう。

出会いは世界を広げていく

交流会を通して

新連載 第2回

土肥いつき DOHI ITSUKI

京都の公立高校教員。24時間一人バレーボール状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

交流会の源流

前号にも書きましたが、この連載のテーマは「交流会」です。なかでも、わたしが世話人をしているのは被差別マイノリティ生徒が集まる交流会です。実は被差別マイノリティ生徒は学校の中にたくさんいます。

しかし、だからといって「出会える」わけではありません。このような中、わたしには交流会をおこなう以前に被差別マイノリティ生徒たちとの出会いがありました。ただ、出会いがあったからといって、それがそのまま交流会という活動につながるわけではありません。なぜなら被差別マイノリティ生徒をエンパワメントする方法はたくさんあるからです。その中で、試行錯誤の末、わたしは「交流会」という方法にたどりつきました。また、わたしが世話人をしている交流会には共通していることがあります。それはプログラムです。「みんなでごはんをつくる」「みんなでごはんを食べる」「自己紹介をする」がそれです。かつて他県で外国人生徒の交流会を運営している人から「目的を持って集まらなければならない」と言われたことがありますが、わたしは「集まることそのものが目的」であっていいと思っています。なぜ被差別マイノリティ生徒と出会えたのか。なぜ「交流会」という方法をとるに至り、なぜ現在のプログラムを選択しているのか。

これらを説明するためには、わたしの教員としての経験だけでなく、わたしの生い立ちまで振り返る必要があるかと思います。そこで、今号からしばらくはこうした話を書こうと思います。ただし、わたしはすでに『「ありのままのわたしを生きる」ために』という形でライフストーリーを書いています。ところどころ重複する内容になることをお許しください。

今振り返って見ると、「人が集まる場」との出会いは、小学生の頃までさかのぼるような気がします。わたしの両親は、わたしをYMCAに通わせていました。YMCAには少年体育のような「何をするのかははっきりしている活動」もありましたが、わたしが所属していたのは「グループ活動」と言われるものでした。グループは同学年の数人の子どもたちと大学生のリーダー

で構成されていました。活動には年間通じた目標などなく、ただ毎週土曜日にYMCAの会館に集まり、同じグループのメンバーと遊んでいました。リーダーも特に何をするわけでもなく、みんなと一緒に遊んでくれました。グループ活動の最後は、みんなで話しあって次の週の遊びの内容を決めます。ただそれだけの活動でした。それでも毎週みんなで集まって、竹馬づくりをしたり、たこ焼きをつくったり、会館全体を使って鬼ごっこをしたりして遊んでいました。ある時は「テント建ての練習」と称して、本来建ててはいけないところにテントを建てたことがありました。当時のテントは、張り方もたたみ方も技術が必要でした。「巡回の人が過ぎ去ってからテントを張りはじめて、次にまわってくるまでに、テントの撤収まですませよう」というリーダーの提案はとてもスリリングで、ワクワクしながら「練習」したことを今でも覚えています。

YMCAでもうひとつ出会ったものは夏のキャンプでした。キャンプには、キャンプファイヤーをはじめ、さまざまなプログラムが用意されていました。しかし、いま振り返るとそうしたプログラムよりも、2泊3日という長い時間を、はじめて出会った他のメンバーとともに過ごした生活を思い出します。もちろんみんなが常に仲よしなわけではありません。時にはケンカも起こります。それでもキャンプが終わる頃には別れたくない仲間になっていました。キャンプでの経験は、まるで1年間の「グループ活動」を2泊3日に凝縮したかのようなものでした。そんなグループをコーディネートしてくれていたのは、やはりリーダーでした。

そんな経験を積むうちに、わたしは「将来リーダーになりたい」と思うようになりました。そしてのちにキャンプリーダーをした経験が、わたしの教員としてのあり方や交流会のつくりかたに大きな影響を与えることとなりました。ただ、リーダー経験について書く前に、もう少し書かなければならないことがあります。次号では、はじめてコミュニティをつくる側になった大学時代のことを書こうと思います。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

英国のトランス、そして日本

トランス女性である著者が、トランス嫌悪的な社会で生きるトランスの現実を幅広い分析によって明らかにする。教育から法制度、医療体制の課題等々、UK（英国）の抱える問題を児童から高齢者まで当事者のおかれている現実を伝えている。日本と共通するところが多く、本書は日本の「トランスジェンダー問題」を考える上でも大いに参考になる 430 ページを超える大著である。

プロローグから読み始め、次はイントロダクション「見られるが聞かれない」、ここまでで 30 ページ。かなりエネルギーを使った。そこで一度立ち止まって、全体の構成を見直すことにした。その結果、邪道かもしれないが、次のような読み方をした。

まず、清水晶子氏（東京大学教授）の解説「スーパー・グルーによる一点共闘——反ジェンダー運動とトランス排除」を、次に訳者解題「日本で『トランスジェンダー問題』を読むために」を読み、それから本文に進んだ。前置きが長くなったが、本書の内容を章ごとに紹介する。

第1章「トランスの生は、いま」

英国のトランスたちの生きる現場を紹介した章である。訳者解題では、日本のトランスジェンダーのことを紹介しているので、日本と英国を対比して読むことができた。

第2章「正しい身体、間違った身体」

トランス医療をテーマとした章である。ここでも、現状と問題点の日英対比ができる。

第3章「階級闘争」

ここでは、具体的な事例を取り上げて、さまざまな闘争についてレポートしている。

第4章「セックスワーク」



トランスジェンダー問題

議論は正義のために

ショーン・フェイ著
高井ゆと里訳 清水晶子解説
明石書店
定価 2200 円（税込）

トランスジェンダーのセックスワークの実態について述べている。

第5章「国家」

この章は「国家による暴力」がテーマである。

第6章「遠い親戚——LGBT の T」

LGBTQ+ の権利運動の中でのトランスジェンダーを主題とした章である。

この章では、セクシュアルマイノリティの中で、トランスジェンダーへの排除が起きている事実を伝えている。このことは、日本でも起きている。訳者は、トランス男性がゲイ男性向けの「ハッテン場」への入場を断られたり、レズビアン向けのバーやイベントで「トランスジェンダーお断り」のルールがあったりする事例は、少なからずあると述べている。

第7章「醜い姉妹——フェミニズムの中のトランスたち」

この章では、フェミニズムとトランスジェンダーの関係を論じている。この章は、ラジカルフェミニストから受けた排除の体験から書き起こしている。訳者は、「この点について日本の状況を考えるには、まずは本書に寄せられた清水晶子氏の解説を読んでほしい」と述べている。

結論「変容された未来」

この章の最後を「私たちは、トランスではない多くの人々のための希望の象徴でもある。そうした人々は、私たちの生のうちに、より完全に、より自由に生きる可能性を見いだすだろう。だからこそ、私たちを憎む人もいる。私たちが自由であるという光り輝く栄華に脅えているのだ。私たちの存在は、この世界を豊かにする。」と結んでいる。

訳者は「あとがき」の最後に、「いつかこの本が読まれる必要がなくなる未来が来る日まで、どうかこの本が広く読まれますように。そしてこの本の読者たちに、少しでもトランスジェンダーたちの生に思いを寄せる時間がありますように。」と記す。

（教育ジャーナリスト 日向野一生）

全国性教育研究団体連絡協議会

▶▶ 8月4日(金)9:30～17:00
8月5日(土)9:30～16:30 ◀◀

第51回全国性教育研究大会

第21回九州ブロック性教育研究大会・第25回熊本県性教育研究大会

テーマ 様々な性の課題を賢明に乗り越え、豊かに生きていくための性教育
～性に関する様々な発達課題及び時代の課題を性教育の実践でどう扱うか～

主なプログラム

- 1日目** 9:30～9:50 **開会行事** 挨拶 開催地活動報告 祝辞
10:00～10:50 **基調講演** 「学習指導要領に基づく性に関する指導」
講師・横嶋 剛 文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官
11:00～12:30 **理事長講演** 「今、学校に求められる性教育とは」
講師・野津有司 全国性教育研究団体連絡協議会理事長・筑波大学名誉教授
13:30～15:00 **講演Ⅰ** 「子どもたちがさまざまな多様性を超えて自由で対等な存在としてともに生きていくために必要な教育とは？～生きた性教育のための哲学的土台～」(動画上映)
講師・苫野一徳 熊本大学教育学部准教授
15:10～16:40 **講演Ⅱ** 「LGBT支援に関して医療の現場から学校へ伝えたいこと～文部科学省通知・教師用資料を医療の立場から読む～」
講師・中塚幹也 岡山大学学術研究院保健学域教授
17:30～19:30 **懇親会**

- 2日目** 9:30～12:00 **分科会Ⅰ(発達段階別)**
「幼児期における性教育の実践」「小学校における性教育の実践」
「中学校における性教育の実践」「高等学校における性教育の実践」
「特別支援教育における性教育の実践」
13:30～16:20 **分科会Ⅱ(課題別)**
「保護者・関係団体と学校との連携と学校における性教育の推進」小貫大輔 東海大学教授
「性非行少年の心理療法」針間克己 はりまメンタルクリニック院長
ワークショップ「ICT教育の目指すもの～性教育への手法の活用のために～」前田康裕 熊本大学特任教授
「文科省通知に基づき子どもたちの婦人科疾患を予防・早期発見するには～月経と子宮頸がんを中心に医療機関や保護者との連携を考える～」宮原陽 みやはらレディースクリニック院長
「性的マイノリティ当事者の児童生徒の理解と学校が求められる支援」日高庸晴 宝塚大学教授

会場 市民会館シアーズホーム夢ホール(熊本市市民会館)及び熊本市国際交流会館 ※懇親会・城見櫓5階

定員・申込み期間 定員/500名 申込み期間/2023年6月1日(木)～7月21日(金)

参加費・申込み・問合せ先等

参加費/両日参加:一般6000円、学生2000円、1日参加:一般3000円、学生2000円 ※懇親会・会費5000円

主催/全国性教育研究団体連絡協議会、九州ブロック性教育研究協議会・熊本県性教育研究会

協賛/日本性教育協会、(一財)熊本県PTA教育振興財団

後援/文部科学省、厚生労働省、こども家庭庁、全国連合小学校長会、全日本中学校長会ほか(一部申請中)

問合せ先/大会事務局 zensei51kumamoto@gmail.com

申込み方法/右記URLもしくはQRコードより。https://amarys-jtb.jp/zenseiren51/



▶▶ 7月8日(土) 日本「性とこころ」関連問題学会 第12回学術研究大会 ◀◀

子どもの生とセクシュアリティ

大人は現代の子どもたちの性とう向き合うのか

【主なプログラム】

大会長講演：「小児性愛という病—それは、愛ではない」 齊藤章佳（大船榎本クリニック）

現代のトピックス：「子どもたちとともに学ぶ『射精道』」 今井 伸（聖隷浜松病院）

教育講演：「＜性＞なる家族—なぜ性虐待は隠蔽されるのか」 信田さよ子（原宿カウンセリングセンター）

メインシンポジウム：「子どもの生とセクシュアリティ～それぞれの現場から見える世界」

山口修平（一宮学園） 櫻井裕子（さくらい助産院） 今西洋介（大阪大学大学院） 高橋幸子（埼玉医科大学）

基調講演：「子どもの生とトラウマインフォームドケア」 小澤いぶき（認定NPO法人PIECES・子ども家庭庁政策アドバイザー）

公開講座（参加費無料）：「知識とともに態度のモデルを～子どもに話す生と性」 小島慶子（タレント・エッセイスト）

【会 場】

ホテルメトロポリタン（東京都豊島区西池袋1丁目6-1）

【参加費等】

会員・事前 2,000 円、当日 3,000 円 一般・事前 3,000 円、当日 4,000 円 学生・事前 1,000 円、当日 2,000 円

事前申込みは、ホームページから <http://www.jssm.or.jp>



【問合せ先】

日本「性とこころ」関連問題学会第12回学術研究大会事務局 医療法人社団 明善会 榎本クリニック 担当：大村
tel：03-3982-5345 / fax：03-3982-6089 E-mail: sei-kokoro1@enomoto-clinic.jp

▶▶ DV・性暴力被害にかかわる 支援者のための研修講座 2023 ◀◀

【コース】

A コース：現在支援活動をしている方、これから活動しようとしている方、すべての方が対象
定員 80 名

R コース：NPO 法人レジリエンスプログラム + 認定 NPO 法人 CFJ RIFCR™ プログラム
定員 40 名（A コースを修了された方が対象）

SANE コース：性暴力対応看護師養成講座 看護職（看護師、助産師、保健師）の女性が対象
定員 30 名（A コースを修了していること、全期すべてに参加することが条件）

【日 程】

プログラムは3期に分かれている

1 期 2023 年 7 月 8 日（土）9 日（日）

2 期 2023 年 11 月 11 日（土）12 日（日）

3 期 2024 年 1 月 20 日（土）21 日（日）

☆コース別に会場開催とオンライン開催に分けて開催

A コース 1 期：オンライン 2 期：会場 3 期：オンライン

R コース 1 期：会場 2 期：オンライン 3 期：会場

SANE コース 1 期：会場 2 期：オンライン 3 期：会場

【参加費・問合せ先等】

主 催：特定非営利活動法人 女性の安全と健康のための支援教育センター

参加費：各コースとも全期参加・会員 50,000 円、非会員 60,000 円

会 場：東京有明医療大学（東京都江東区有明 2-9-1）

問合せ・申込み先：https://shienkyo.com/?page_id=16



すぐ授業に使える

性教育実践資料集 中学校改訂版

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集 中学校改訂版



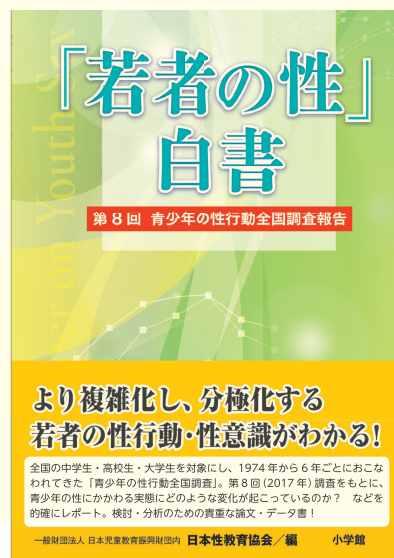
定価 2,200 円（税込） B5 判・224 ページ

「若者の性」 白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込） A 5 判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！